

2019年(平成31年)

1月23日

水曜日

夕刊

神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7

<https://www.kobe-np.co.jp>

購読のお申し込み 0120・16

先月、総合地球環境学研究所主催の「アンソロポシオン」に関する国際シンポジウムで、共同議長を務めた。ハーバード大やマックスプランク研究所(ドイツ)、チュラロンコン大(タイ)、韓国科学技術院などから研究者が参加。「風土学」のオギユスタン・ベルクや「近代の再構築」の著者ジュリア・トマスなども発表を行った学際的集まりである。

「アンソロポシオン」とは聞きなれない言葉だが、ここ数年、盛んに議論されるようになった新たな地質年代区分である。われわれが生きている時代は「完新世」と呼ばれてきた。それは約1万年前に始まる。しかし温暖化など人間の負の刻印が地球レベルに及んだ現在は、もはや別の時代に入っている。そんな議論が起こり、アンソロポス(人)とシオン(新)を組み合わせた造語が提案された。日本語に訳すと「人新世」だ。

それは、地質学、つまり自然科学に関わる問題だが、人間の歴史を、人間の歴史を超えた超長期の

随想 アンソロポシオン(人新世)と知の再考

寺田 匡宏

過去に接続させようとしている点で、広く人文学にも関わる。

一般に歴史は、人間が主体となり展開する過程とされる。だがアンソロポシオンは、それを中生代、古生代、原生代へとさかのぼる46億年の、非人間や非生物を含む地球的時間へと接続する。

それはこれまで進化と呼ばれ、歴史と呼ばれてこなかった。例えば、ナショナルヒストリーは歴史をネーション(国家)の起こりから始めるし、史的唯物論の語りは、階級社会の発生から始まる。近代の国民国家と資本主義の時代に一世を風靡した語りである。

近代の学問は、進化と歴史を別個に扱ってきた。だが、グローバルな持続可能性が課題となる時代に、それを超えた新たな過去の語りが求められている。従来の学問と異なったモードの必要性でもある。地球環境への危機感がもたらした新たな時代区分の提唱は、知の在り方への問いも含んでいる。

(てらだ・まさひろ) 総合地球環境学研究所客員准教授